

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

無碍の一道 第73号

発行:2020年5月8日

発行者:浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺
〒739-0147 副住職 天野英昭

東広島市八本松西6丁目10番1号

☎・FAX 082-428-1360

宗祖親鸞聖人降誕会法座(中止)

日時 5月19日(火) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~ 昼席 13:00~

ご講師 朝枝 暁範 師(北広島町 本立寺住職)

第101回歎異抄輪読会(中止)

日時 5月21日(木) 14:00~15:30頃

ご講師 松田正典先生(広島大学名誉教授)

費用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です

安居会法座(未定)

日時 6月17日(水) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~ 昼席 13:00~

講師 龍 善暢 (島根県太田市大森町 西性寺住職・妹の夫です。)

10年間のご縁を通して感じさせていただきました。(Ⅱ)

しかしながら、物心ついたころから、雨が降れば降ったで不平を言い、晴れが続けば続いたで不平を言い、雪が降れば降ったで不平意を言い、一方で私自身学生から、教員をへて、今僧侶をさせていっていており表面的には変わってありますが、常に勝った・負けた、得した・損した、今日は役についた・役にたたなかった、今日は調子が良い・今日は調子が悪いと、ただただ目の前の事象に対

して、常に自分の都合で良い・悪いを繰り返してきたと考える事があります。

大きな視点から申しますと何も変わっていない人生を過ごしてきたのかとも考える事があります。ただこれも比較の世界に生を受け、生きているために、人と比較し、比較されながら生きていなくてはならない境涯に生きているために、ある先生のお言葉をお借りしますと「避ける事が出来ない、人間の性^{さが}であり、宿命なのかとも思う事でもあります。」その意味からしますとこれからも目の前の事象に一喜一憂しながら、人生の終焉を迎える自分を想像することでもあります。

また、自分という存在に執着するのが人間であり、『我愛・我見』の言葉の如く、自分に始終囚われ、大切な自分の回りの方々と争い・傷つけあいながら生きていかざるおえない哀しい存在であるとも高飛車ながら考える事もあります。

少し話は展開しますが、お葬儀が終わって、お骨を納める法要を収骨法要と申します。いくらこの世で地位・名誉・財産等と得て、栄華を極めたとしても、すべての人は荼毘に付され、小さなお骨壺の中に入られます。ある方が、100年経てば土にかえり、30年・50年もすれば多くの人の記憶からなくなる存在であるのご指南をいただいたことがあります。収骨法要の多くのご縁に遇わせていただき、私なりにいろいろと考えさせられたことでもあります。

しかし、花にもそれぞれに輝きがあるように、人間にもそれぞれに輝きがあると教員時代から、関わった生徒を通して学んだことでもあります。桜には桜の輝きがあり、バラにはバラに輝きがあり、道端に咲いている小さな花には、小さな花の輝きがあると思う事でもあります。

当山の桜は3週間前に満開を迎えました。桜は、幸せ物だなと思うことがあります。人から喜ばれ、今年は無理でしたが、花見などの時には多くの人の心を潤わすと思うことです。

ある日、桜を見ておりますと、ふと自分の足元を見ますと小さな花を踏んでおりました。この小さな花は、誰に見向きもされず、評価もされない中で、その日いただいた精一杯の生命^{いのち}を輝かせて生きているのだと思ったことです。

最後に、これまで度々申してきましたが、残念ながら日々出逢う多くのご縁は、自分の意図しない・願わないご縁であると思います。しかしながら、今申しました小さな花のごとく、人に見向きもされず・評価もされない日々のご縁の中で、自分なりにその日いただいた生命^{いのち}を輝かせることができると言うことでもあります。

一昨年の西日本豪雨災害、この度のコロナウイルスの経験を受けて・・・(I)

最初から高飛車な言い方になりますれば、ご理解等をいただければありがたいと存じますが、歴史を少しかじった者として一昨年の西日本豪雨災害、この度のコロナウイルスとしみじみ思いますことに、私たちは歴史を振り返る際に、ともすれば政治・経済に目が向きがちですが、人類の2000年、4000年の歴史はある意味戦争と災害と病気との戦いの歴史でもあると教員時代、生徒に偉そうに申してきました。(次号に続きます。)